

赤い魚と子供

小川未明

青空文庫

川かわの中なかに、魚さかながすんでいました。

春はるになると、いろいろの花はなが川かわのほとりに咲さきました。木きが、
枝えだを川かわの上うえに拈ひろげていましたから、こずえに咲さいた、真紅まっかな花はなや、
またうす紅くれないはなの花はなは、その美うつくしい姿すがたを水みずの面おもてに映うつしたのであります。

なんのたのしみもない、この川かわの魚さかなたちは、どんなに上うえを向むいて、水みずの面おもてに映うつた花はなをながめてうれしがったではありませんよう。

「なんというきれいな花はなでしょう。水みずの上うえの世界せかいにはあんなに美うつくしいものがたくさんあるのだ。こんどの世よには、どうかして私わたしたちは水みずの上うえの世界せかいに生まれ変わかってきたいものです。」と、魚さかなたちは話はなし合あっていました。

なかにも、魚の子供らは躍り上がって、とどきもしない花に向
かつて、飛びつこうと騒いだのです。

「お母さん、あのきれいな花がほしいのです。」といいました。
すると、魚の母親は、その子供をいまして、いいますのに
は、

「あれは、ただ遠くからながめているものです。けっして、あの
花が水の上に落ちてきたとて食べてはなりません。」と教えまし
た。

子供らは、母親のいうことが、なぜだか信じられなかった。

「なぜ、お母さん、あの花びらが落ちてきたら、食べてはなりま
せんのですか。」と聞きました。

母親ははおやは、思案顔しあんがをして、子供こどもらを見守りみまもながら、

「昔むかしから、花はなを食たべてはいけないといわれています。あれを食たべると、体からだに變かわりができるということです。食たべるなというものは、なんでも食たべないほうがいいのです。」といいました。

「あんなにきれいな花はなを、なぜ食たべてはいけないのだろう。」と、一い匹びきの子供こどもの魚さかなは、頭かしらをかじげました。

「あの花はなが、この水みずの上に、みんな落おちてきたら、どんなにきれいだろう。」と、ほかの一い匹びきは目めを輝かがやかしながらいいました。

そして、子供こどもらは、毎まい日にち、水みずの面おもてを見上みあげて、花はなの散ちる日ひをたのしみにして待まっていました。ひとり、母ははおや親おやだけは、子供こどもらが自じ分ぶんのいましめをきかないのを心しんぱい配ぱいしていました。

「どうか、花を私の知らぬまに食べてくれぬといいけれど。」と、ひとり言をしていました。

木々の咲いた花には、朝から、晩になるまで、ちようや、はちがきてにぎやかでありましたが、日がたつにつれて、花は開ききつてしまいました。そして、ある日のこと、ひとしきり風が吹いたときに、花はこぼれるように水の面にちりかかったのであります。

「ああ、花が降つてきた。」と、川の中の魚は、みんな大騒ぎをしました。

「まあ、なんというりっぱさでしょう。しかし、子供らが、うっかりこの花をのまなければいいが。」と、大きな魚は心配して

いました。

花は、水の上に浮かんで、流れ流れてゆきました。しかし、後から、後から、花がこぼれて落ちてきました。

「どんなに、おいしかろう。」と行って、三びきの魚の子供は、ついに、その花びらをのんでしまいました。

その子供らの母親は、その翌日、我が子の姿を見て、さめざめと泣いたのです。

「あれほど、花びらをたべてはいけないといったのに。」と叫びました。

黒い子供の体は、いつのまにか、二ひきは、赤い色に、一ひきは白と赤の斑色になっていたのです。

母親ははおやの歎なげいたのも、無理むりはありませんでした。この三びきの子供こどもが、川中かわなかでいちばん目立めだって美しく見えたからであります。そして、川の水かわみずは、よく澄すんでいましたから、上うえからでものぞけば、この三びきの子供こどもらが遊あそんでいる姿すがたがよくわかつたのであります。

「人間にんげんが、おまえらを見みつけたら、きっと捕とらえるから、けつして水みずの上うえへ浮ういてはならないぞ。」と、母親ははおやは、その子供こどもらを見みました。

町まちからは、こんどは、人間にんげんの子供こどもたちが毎まい日にち川かわへ遊あそびにやってきました。

町まちの子供こどもたちの中で、川かわにすむ、赤あかい魚さかなを見みつけたものがあり

ます。

「この川かわの中なかに、金魚きんぎよがいるよ。」と、その魚さかなを見た子供こどもがい
いました。

「なんで、この川かわの中なかに金魚きんぎよなんかがいるもんか、きつとひご
いだろう。」と、ほかの子供こどもがいいました。

「ひごいなんか、なんでこの川中かわなかにいるもんか。それはお化けば
だよ。」と、ほかの子供こどもがいいました。

けれど、子供こどもたちは、どうかして、その赤い魚あかさかなとを捕らえたいば
かりに、毎日まいにち川かわのほとりへやつてきました。

町まちでは、子供こどもたちの母親ははおやが心配しんぱいいたしました。

「どうして、そう毎日まいにち川かわへばかりゆくのだえ。」と、子供こどもたち

をしかりました。

「だって、赤い魚あかさかながいるんですもの。」と、子供こどもは答えました。

「ああ、昔むかしから、あの川かわには赤い魚あかさかながいるんですよ。しかし、それを捕とらえるとよくないことがあるというから、けっして、川かわなどへいつてはいけません。」と、母親ははおやはいいました。

子供こどもたちは、母親ははおやがいったことをほんとうにしませんでした。どうかして、赤い魚あかさかなを捕つかまえたものだど、毎日まいにち、川かわのふちへきてはうろついていました。

ある日ひのこと、子供こどもたちは、とうとう赤い魚あかさかなを三びきとも捕つかまえてしまいました。そして、家うちへ持もつて帰かえりました。

「お母かあさん、赤い魚あかさかなを捕つかまえてきましたよ。」と、子供こどもたちはい

いました。

お母^{かあ}さんは、子供^{こども}たちの捕^{つか}まえてきた赤^{あか}い魚^{さかな}を見^みました。

「おお、小^{ちい}さいかわいらしい魚^{さかな}だね！ どんなにか、この魚^{さかな}の母^は

親^{はおや}が、いまごろ悲^{かな}しんでいるでしょう。」と、お母^{かあ}さんはいい
ました。

「お母^{かあ}さん、この魚^{さかな}にもお母^{かあ}さんがあるのですか？」と、子供^{こども}た
ちはききました。

「ありますよ。そして、いまごろ、子供^{こども}がいなくなつたといつて
心^{しんぱい}配^{はい}しているでしょう。」と、お母^{かあ}さんは答^{こた}えました。

子供^{こども}たちは、その話^{はなし}をきくとかわいそうになりました。

「この魚^{さかな}を逃^にがしてやろうか。」と、一人^{ひとり}がいました。

「ああもう、だれも捕まえないように大きな河へ逃がしてやろう。」と、もう一人がいました。子供たちは、三びきのきれいな魚を町はずれの大きな河へ逃がしてやりました、その後で子供たちは、はじめて気がついていました。

「あの三びきの赤い魚は、はたして、魚のお母さんにあえるのだろうか？」

しかし、それはだれにもわからなかつたのです。子供たちはその後、気にかかるので、いつか三びきの赤い魚を捕まえた川にいつてみましたけれど、ついにふたたび赤い魚の姿を見ませんでした。

夏の夕暮れ方、西の空の、ちやうど町のとがった塔の上に、そ

の赤い魚あかさかなのような雲くもが、しばしば浮うかぶことがありました。子供こどもたちは、それを見みると、なんとなく悲かなしく思おもったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷発行

1981（昭和56）年1月6日第7刷発行

初出：「金の塔」

1922（大正11）年9月

※表題は底本では、「赤《あか》い魚《さかな》と子供《こども》
《》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い魚と子供

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>